令和６年３月９日

田中英道　先生

『古事記の波多氏について』

令和 6 年 6 月 29 日　令和 6 年度 北公民館主催シニア対象講座 北☆北シニアカレッジ

『吉備国の古代史・上道氏と幡多(波多)氏の謎』

黄蕨の会 丸谷憲二

1 はじめに

幡多二千年の歩み編集委員会の『幡多二千年の歩み』出版は平成 8 年(1996)です。「秦・長曽我部の会、全国連合会」が 3 月に発足します。吉備国の古代史解明に必要なのは、**上道氏と幡多(波多)氏との関係の明確化**です。下道氏、和気氏の研究が進んでいますが、「上道中子仲彦が上道臣の祖であること」「備前国造の上道臣斐太都が仲麻呂政権下で上道正道と名前を変えていること。」「宝亀 11 年(780)の『西大寺資財流記帳』(奈良西大寺文書)の上道広成の南都西大寺への大豆田庄の寄進」は、備前西大寺の地名の由来ですが知られていません。『国学院大学・氏族データベース』から古代の上道臣を紹介し考察します。**謎の意味は「吉備国の全ての部族の先祖渡来人」説**です。**吉備津彦命は東突厥国、上道氏はインド**(巨石文化)、**波多氏は弓月国**です。**黄蕨津彦命の東突厥国は波多氏の弓月国の近く**です。弓月国は東突厥国に含まれるかもです。

11.8 幡多廃寺と賞田廃寺と古都廃寺

上道氏の氏寺として 3 寺院が創建され、出土瓦等から 3 寺院が一体的に経営され上道氏の強大な権力と中央政権との強い繋がりが推定されます。幡多廃寺塔跡(岡山市中区赤田)は仏教寺院跡に残る塔跡の遺跡で、塔跡が国指定です。塔心礎の大きさは県下最大です。心礎表面には被熱痕があります。上道氏の氏寺の一つと推測されますが、**地名から幡多氏の氏寺**です。**備前国府跡があり、地域一帯は古墳時代から奈良時代にかけての古代吉備の中心地でした。**

図-9 幡多廃寺塔跡

11.8.1 幡多氏の考察

総社市は秦で岡山市は幡多です。多に注目しました。**『古事記』は波多**です。波多地名、肥前国松浦郡波多村(佐賀県唐津市)、大和国高市郡波多郷(奈良県高市郡明日香村畑)、出雲国飯石郡波多郷(島根県雲南市掛合町)、肥後国天草郡波多郷(熊本県天草市)で、幡多郷地名は、三河国渥美郡幡多郷、近江国長下郡幡多郷、紀伊国安諦郡幡陀郷、肥後国天草郡波多郷です。**『古事記』に「波多の八代の宿禰」と「波多」**と書かれています。

中国の景教(ネストリウス派キリスト教の中国での呼称)ではギリシャ語の司教(パトリアーク)の漢訳が「波多力」です。ギリシャ語″πατριαρχής″(パトリアルケース)は、ラテン語では″patriarcha″(パトリアルカ)。旧約聖書の七十人訳では族長時代の族長。『旧唐書』巻 198 によると、貞観 17 年(643)「拂菻王波多力」(**波多力は「Papas Theodoros」の音写**か。ただ、当時の皇帝はコンスタンス 2 世であり、該当する人物が定かではない。)

『古事記』の記録は正確です。『日本書紀』では、応神天皇 14 年に百済より百二十県の人を率いて帰化したと記され、**弓月君を秦氏の祖**とするとあり、**弓月君は朝鮮半島を経由しての渡来**です。 **秦氏の故郷、弓月国(クンユエ) は中央アジアのカザフスタン内** にあります。天山山脈のすぐ北側に位置し南にキルギスタンがあります。**弓月国はシルクロードの北方ルート上**にあります。**バルハシ湖の南、イリ川付近**です。弓月国の人々も万里の長

城の苦役に耐え切れず日本へ渡来しました。1084 年(元豊 7 年)成立の『資治通鑑』全 294 巻、巻第 199 に弓月の記録があり、弓月国を発見したのは言語学の佐伯好郎氏です。

吉備国の最古の表記・黄蕨の語源調査結果は東突厥国を意味しています。東突厥国から吉備国への渡来です。これは**日本人バイカル湖畔起源説**であり、**古代から吉備国への渡来ルートがあり、**アルタイ語民族のほとんど全てに見られる文化的要素が扶余、高句麗を通じ、さらに百済、新羅など朝鮮半島を経由して、古代日本の形成期に吉備国に伝わりました。**私たちが学校で習った藤原氏の日本史『日本書紀』では記録が消されました。**

15 まとめ

岡山県立図書館蔵書の上道氏調査は、出宮徳尚氏(岡山市教育委員会)の 1976 年『古代吉備の豪族 上道氏 -その形成への地域史からの展望-』で止まっているようです。**今回のテーマを「吉備国の古代史・上道氏と幡多(波多)氏の謎」としました。謎の意味は「吉備国の全ての部族の先祖渡来人」説です。吉備津彦命は東突厥国、上道氏はインド(巨石文化)、波多氏は弓月国です。黄蕨津彦命の東突厥国は波多氏の弓月国の近くです。弓月国は東突厥国に含まれるかも**です。今回の最大の成果は『日本書紀』を小説(創作)と読み、上道臣と香屋臣の祖である中子仲彦と第 14 代仲哀天皇の名前が「仲彦と足仲彦」を同一人と読みました。 一人の業績を二人に分割したと。 気比神宮の桃太郎像と岡山の桃太郎伝説が完全に結びつきました。

『日本書紀』の研究で、このような読み方は私が初めてのようです。吉備国と角鹿笥飯宮が結ばれました。地名学の成果です。 神武天皇の兄 稲飯命(いないい)⇒新羅の王⇒半島交易を紹介しました。倭国と新羅との関係が明確になりました。**幡多氏の考察として『古事記』に注目し、「波多の八代の宿禰」から中国の景教ではギリシャ語の司教(パトリアーク)の漢訳「波多力」は「Papas Theodoros」の音写か**としています。

※ 講演資料は完成しています。メール戴ければ添付致します。

『日本神道を考える』平成28年3月8日　先史古代研究会 丸谷憲二

問題提起 『白洲正子の宿題「日本の神」とは何か』を考える。先史学による回答 2 つの事例による報告

『龍蛇様(背黒海蛇)から見える出雲の神迎祭と神在月』平成26年12月31日

何故、毒性のある海蛇を神の使いとして奉納するのか。セグロウミヘビ(コブラ科)が出雲神の最も身近な海蛇であった。つまり出雲神はインド洋周辺の低緯度地域からの渡来人と推定する。佐太神社のみがセグロウミヘビを「龍蛇神」と呼び、神紋が「亀甲」のみです。つまり神迎祭発祥の地です。インド洋周辺の低緯度地域に sada という地名があると考え調査し発見した。インドの Nawada Sada です。**出雲神はインド洋周辺の低緯度地域からの渡来人説は証明された。**

『吉備津神社七十五膳据神事の七十五の起源についての考察』平成 27 年 5 月 23 日

2 回目のなぜを「先住民族、洩矢神の渡来元の推定」とした。

御贄柱（おにえはしら）から子供の生贄に到達し、

① **『旧約聖書』**創世記第22 章から、イサク奉献伝承に到達。

② **『新約聖書』**使徒行伝第 7 章14 節から、イサクから枝分かれした親族数が75てす。